From underground

立早　光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｆｒｏｍ　ｕｎｄｅｒｇｒｏｕｎｄ

【Ｎコード】

Ｎ８５８１Ｂ

【作者名】

立早　光

【あらすじ】

深い闇の底にある黒い街。建物や食物だけでなく、住人も真っ黒な世界に彼はいた。

1. 腕時計

暗く、どこまでも深く続くように見える暗闇の底には何があるのか。
その問に答える術を私は持ち合わせていない。
それは酷く悲しむべき事であり、また「知らずに済んでいる」という事実に喜ぶべきなのかもしれない。
人間の欲というものはあまりにも醜い。
見る必要性のない事柄を見たがり、知る必要性のない事柄を知りたがる。
此処はそんな虚栄に満ちた光の世界とは一線を画した黒い世界。
モノクロの世界に表情のない住人。
光はなく、影の濃淡でかろうじて輪郭が分かる世界。
そんな…情報が僅かにしかない世界に、彼らはいた。

すいません、と男は尋ねた。
男は真っ黒なスーツらしきものに、真っ黒な帽子を被り、真っ黒な靴を履き、上から下まで真っ黒であった。
奇妙な事に、その男の右腕には本来ならばあるはずのない色のついた腕時計があった。
これを直して頂きたいのですが、と続けて男は喋った。
貴方、これを何処で手に入れたのですか、と店主は問うた。
黒の住人である以上、そこに表情など殆どないはずなのだが、その店主は不思議そうな顔をしているようだった。
これはこの世界にはあってはならない品物ですね、何処で手に入れたのですかと店主は問うた。
それは言えません、と男は答えた。
秘密…という事なのですね、それはそれで構いませんよ、と店主は答えた。
秘密…という程の事ではないのですが…男は躊躇いながら言葉を選

んでいるようであった。
濃淡でギリギリ目だと分かる男の目が、遥か彼方に見える螺旋階段を見つめていた。
見つめていたという表現をするのには抵抗があるが、それしかその男の行っている行動を表現する方法が他にはない。
成る程、あの階段に近づいたのですね？と店主は無関心そうに聞いた。
知りたかったのです、と男は述べた。
知的好奇心が旺盛なのは構いませんが、好奇心が願望に変わらない事を切に祈っていますよ、と色のついた時計を弄る店主。
男は何も答えずに、螺旋階段を見つめ続けていた。

おや、これはおかしいですね、と黒い眼鏡を黒い顔から外して店主は述べた。
そうなのです、秒針がついたいないのです、と男。
男は秒針がない事に対する苦労話を熱心に始めた。

私はよく夢を見るのです。
しかし、その夢はあまりにも現実と似すぎていて区別がつきません。
そして気付くと夢は終わり、私は現実に引き戻されるのですが…困った事に、今が夢の中なのか現実なのか分からなくなってしまうのです。
不勉強ながら夢の始まりというものを知らない為に、一層区別がつかなくなってしまうのです。
終わりは唐突にやってくるが、始まりには気づく事が出来ない。
しかし、私はある方法を使って今が夢の中なのか現実なのかを区別する事にしたのです。
時計です。
現実にそっくりな夢の中では、時間が酷く早く進むという事実に気付いたのです。

なので秒針の進み方を見れば一目瞭然なのですが、生憎私の持っている腕時計には秒針がついていないのです。
なので、今が１秒なのか３２秒なのか５６秒なのかが私には分からないのです。
それは常に同じ1分であり、1分から2分へは唐突に変わってしまうのです。

そうですか、お気の毒にと大して気に留めずに店主は答えた。
いえいえ、聞いて下さってありがとうございます、と男は答えた。
それでは時計をお返ししますと言って、黒い秒針のついた色つきの腕時計を男に返した。
ありがとうございます、それではまた、と満足そうに男は店主と別れた。

2. 「ソレ」

いつの間に黒の景色に慣れてしまったのだろうか。
記憶を幾ら遡ってみても、思い出せるのは一面黒一色。
人も建物も植物も何もかも。
慣れてくれば、それが黒だけではなく淡い黒や濃い黒といった無限に近い種類を持つ黒だと判別出来るに至る。
しかし慣れない人が見たら、それはさながら黒い海のようであろう。
否、我らを見渡せる他者など此処には存在しない。
ならばその様な可能性を考えるだけ、時間と労力の無駄というものだ。
光の世界には、我らの世界にはない色という濃淡以外の違いのある概念があるらしいが…
それを拝む機会など今後ないだろうし、拝みたいとも思わない。

何を見ているのですか、と少女の形をした影は尋ねた。
それは一見すると少女の形をしているが、ともすると老婆の様にも見える。
喋り方からは判別する事が難しいが、「ソレ」は男に尋ねた。
男は何も答えなかった。いや、もしかすると答のかもしれないが、それは私たちが聞き取れる言語ではなかったように思える。

何を見ているのですか、と少女の形をした影は尋ねた。
男は、●●じゅ●●●●です、と今度は聞こえるように答えた。
しかしながら「じゅ」という音以外は、私たちが通常使っている言語とは明らかに異なると思われる音で構成された単語であった。

それを聞き取れたのか、また聞き取れなかったのかは分からないが、「ソレ」は頷いてみせた。

私も好きですよ、あくまで空にある場合に限り…ですが、と「ソレ」は語った。
男は、成る程…それもそうですね、と感慨深げに答えた。

その後、暫く2つの黒い影はある1点を見つめているようであった。
顔まで真っ黒なので、一体何処を見つめているか判別は不可能であったが、さながら「見つめている」といった風体であった。
何かを欲しているのだろうか。
何かを望んでいるのだろうか。

私は手に入れたいのです、と男。

おやめなさい、と「ソレ」。

「ソレ」は急にゆっくりとした口調になり、男を諭し始めた。

違いは争いを生み出します。
争いは変化を生み出します。
変化は違いを生み出します。
違いは争いを生み出します。
争いは変化を生み出します。
変化は違いを生み出します。
生み出します、生み出します、生み出します、生み出します。
生み出します生み出します生み出します生み出します生み出します
生み出します生み出します生み出します生み出します生み出します
生み出します生み出します生み出します生み出します生み出します
生み出します生み出します生み出します生み出します生み出します
生み出します生み出します生み出します生み出します生み出します
生み出します生み出します生み出します生み出します生み出します
生み出します生み出します生み出します生み出します生み出します

生み出します生み出します生み出します生み出します生み出します生み出します生み出します生み出します生み出します生み出します生み出します生み出します生み出します生み出します生み出します生み出します生み出します生み出します。

気付くと、「ソレ」の口元が裂けていた。
顔よりも暗く深い黒が、男の腕に喰らいついていた。

すると、男の腕にあった色のついた腕時計はなくなってしまった。

これで貴方も完全に私たちの仲間ですね、と「ソレ」は通常通りの口調で述べた。

男は真っ黒な帽子を何処からか取り出し、目深にかぶって其処を離れた。
螺旋階段を目指して。

3．螺旋階段

天を見上げてみるも、其処には天は無く。
地を見下ろしてみるも、其処に地は無い。
ただ、立っている事に違いは無いのだが、地に足が着いているのかという話になると如何せん答えようがないのだ。
上も下も、左も右も。
結局のところ、大多数の人がその漠然とした概念を信じているだけで。
もしかしたら…そう、本当にもしかしたら。
全員が全く違う景色を見ているかもしれないじゃないか。

螺旋階段、そう呼ばれている塔のような物に近づく。
全てが黒の闇の世界にありながら、一際異なる存在感を示している塔。
上りきった先には一体何があるのか。
以前塔の近くに散歩しにいった時に拾った色のついた腕時計。
何かの衝撃で秒針が取れていた。
という事は、腕時計に衝撃が加わる高さから落ちてきた事になる。
あの塔の上には…確実に「何か」がある。
今とは違う、新しい「何か」が。
見てみたい。
感じてみたい。
触れてみたい。
確かめてみたい。
最初はほんの好奇心であった、しかし次第にソレは紛れも無い願望へと変わっていった。
今の私の腕にはこの世界では在り来たりな真っ黒な腕時計。
正しい時刻を指しているのだろうが、文字盤も黒いので何時なのか

が分からない。
いや…仮に時刻が読めた所で、それは一体何を基準とした時刻なのだろうか。
何でもかんでも同一色に染め上げられた世界に不自由はない。
仲間はずれも無い。
だが、しかし。
変化がない。
皆、一様に変わる事を恐れているのだろうか。
変化を加えようとしていない。
私は変化が欲しい。
私は皆と違うという安心が欲しい。
同一は耐えられない。
皆と同一という事は、代わりが利くという事だ。
此処に、私がいなくてはならない存在理由にはなり得ない。
私は、私だけの私になりたい。
私。
私は私。
私は…本当に私…？
私は…
私は…
私は…

塔が近づいてきた。
間近で見上げると本当に大きな建物だ。
一体誰が、何の為にこんな建物を作ったのだろうか。
期待と不安に胸の鼓動が高鳴るのを感じつつ、私は階段を一段、また一段と踏み締め登っていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8581b/

From underground

2011年1月11日03時51分発行